

## 国連大学グローバルセミナー：北海道セッション

### 北海道大学苫小牧研究林

#### グループ2：白老町

#### \*メンバー

久野 桂太朗・児玉 和大・久保 溪女・松尾 ひかる・樋口 歩

#### \*訪問場所

萩の里自然公園

トラストの森（NPO 法人ウヨロ環境トラスト）

ポロトコタン アイヌ民族博物館

#### \*概要

わたし達のグループは大きく分けて「萩の里自然公園」と「トラストの森」、「ポロトコタン アイヌ民族博物館」を巡った。

グループワーク初日は、NPO と町役場が一丸となって管理を進めているという「萩の里自然公園」であった。公園には、船大工さんにより建てられた鳥居や、長く使われた炭窯跡が残されていた。一方で、管理者の現在の取り組みに言えるのは、小学生に向けてのワークショップに特徴づけられるような、「町のシンボル」としての公園作りであった。

午後は「トラストの森」へ移動。実際に間伐や、枝打ちなど、林業の一部を体験させていただいた。現在は、NPO 法人ウヨロ環境トラストにより、蔓延した放置人工林から、管理された森林、自然林再生へのシフトを目指し、植林、間引き、伐採等、様々な森作りのフェイズに気を配り、活動している。

フィールドワーク二日目には、アイヌ民族博物館を訪れた。アイヌの伝統料理を頂き、館長と巡った中で魅せられたのは、アイヌの”カムイ（アイヌにとっての神≒自然）”への真摯な畏敬の念であった。自然のものを根絶やしにしないようにし、自然の恵みに感謝して持続性のある暮らしをしていたことがよくわかった。



<萩の里自然公園の鳥居>

60年ほどまえ、船大工さんにより建てられた鳥居は、自然への畏怖と敬意の姿勢の表れといえる。

一度、いらないのではないか、という案出されながらも取り壊されなかったのは、現在も管理者がその思想に共感できていることの表れだ。

**\*個人の感想**

<萩の里自然公園>

・道をアスファルトにするか否かという議論がされていたのは重要であると感じた。  
「高齢者や、体に障害のある方にも里山で自然を楽しんで欲しい」という考えと「自然にある生物の多様性を残したい」という両方の意見が対立したとのこと。ただ、選択肢の一つとして水はけの良いアスファルトを使用するという可能性もあったのではないだろうか。

・萩の里自然公園における取り組みは、行政と市民の横のつながりにより現在まで成長したのだなと感じ取ることができた。「円卓会議」と名を冠した2ヶ月に一度の会議からは人々の愛着と誇りを垣間見ることができた。

難点として気にとまったのは、縦のつながりづくりである。それも入園者のみならず、管理の側の次の世代(担い手)である。小学生に向けてのワークショップなど、市民へのつながりづくりも存在したが、中学生、高校生等、広い年代へのアプローチが必要だと思った。

<トラストの森>

・普通の山の砂利が産業として成り立つほど価値があるのに驚いた。砂利をとった後の埋立地に、白樺などが自然に、しかも、あたり一面に生えてきたのは感動した。外来種のカラマツがはえて果たしてよいかという問題に関しては、正しいのかどうか、わからないけれども、個人としては、倫理的に考えるよりも、カラマツガそのまま育ったらどうなるか検証して自然林として成り立つなら残していいと思う。

・手入れした林としていない林の違いを考えさせられた。人間が始めたことは、最後まで人間が責任をもたないとダメなんだと思った。再生っていうより、共生って感じで付き合うべきだと思う。じゃないと持続的じゃないと思う。

<ポロトコタン アイヌ民族博物館>

・無意識に我々は、日本は単一民族だと思いがちだ。しかし、アイヌを弾圧、同化してきた歴史は確かにある。アイヌの人々は、アイヌを認めて欲しいと思っているうえに、本土の人間もアイヌを知る必要がある。マイノリティーを、同化でも、保護でもなく、一歩引いた位置から見守る姿勢が必要なのではないだろうか。

・イオル再生事業が行われているところを見学した。彼らは再生された自然の中で文化を伝承していきたいのだろうか。現在の生活と、アイヌの生活様式はどこまで融合しつつ、アイヌ文化を伝承してゆけるのだろうか。

\*まとめ

映画「バベル」では、アメリカ人の子供が、メキシコで淡々と食用の鶏が殺される場面に出くわし、驚く。そういった描写からもわかるように、自然と人間との間にある「生死がかかっている」というリアルは今や消毒されがちである。

「環境保全」という考え方には、人間が自然を管理するという「上から」の意味が暗に込められている。また、自然と自分たち人間が空間的にも心理的にも距離をとってしまった。そのような「環境保全」という考え方を一度客観視してみて、白老の人々、アイヌの人々の持つ「畏敬の念」という思いを参考に「自然」に対する捉え方を見直す必要性を垣間見ることができた。

